

(創作音楽劇)

FELIX 〽メンデルスゾーンの生涯

Script of Felix - Life of Mendelssohn -

狩谷 新

プロローグ

タイトル ロベルト・シューマン家 1850年 デュッセルドルフ

コーヒーを飲んでいるロベルトとクララ

クララ「漸くあなたも落ちて着いて仕事ができるわね。ロベルト・

シューマン・デュッセルドルフ音楽監督殿！」

ロベルト「正に漸くだな、42歳にして、愛するクララと6人の子

供たちをやっと自分の稼ぎで養えるようになった」

クララ「皮肉に取らないで、本当に喜んでるんだから」

ロベルト「分かってるよ。ドレスデンでは、迷惑をかけたからな」

クララ「中途半端だったウイーン体制の影響を受けてたのよ。そん

なところでもあなたは立派に仕事をしてたじゃない」

ロベルト「確かにバッハの勉強は…」

クララ「どうしたの？」

ロベルト「奴は…もういないんだな」

クララ「そういえば、あの人も…」

ロベルト「フェリックスがこの町の音楽監督になったのは、24の

時だ」

クララ「もう三年になるのね」

ロベルト「バッハの研究で僕が成果を示せるのも、フェリックスの

おかげだ」

クララ「あなたはあの人とは違うわ。比べるのは…」

ロベルト「比べる？比べられるもんか！フェリックス・メンデルス

ゾーンは天才だ。しかも、裕福な家庭で育った、誰からも好か

れる男だった」

クララ「でもワーグナーは嫌ってた」

ロベルト「4つ年下だとはいえ、認められたのは8年前、29の時

だ。今はリストを頼って、亡命暮らし、早熟の天才を嫌う条件

は整ってるさ」

クララ「10歳下の私は尊敬してたけど…」

ロベルト「フェリックスは、ウイーン体制の申し子だ」

クララ「確か、フェリックスが生まれた年に、メッテルニツヒが

オーストリアの外務大臣になって…」

ロベルト「1809年だ。ハンブルグで生まれて、父親の銀行がナ

ポレオンの大陸封鎖に従わなかった関係で、2歳の時にベルリ

ンへ移り住んでる」

クララ「6歳で、お母様からピアノを教わり、8歳で、パリでマ

リー・ビゴーに手ほどきを受け、その頃から、ベルリン・ジン

グアカデミーのツェルターに作曲を習い始めている」

ロベルト「それだけじゃない。銀行家として成功していたフェリッ

クスのお父さんは、子供たちに英才教育を施してた。語学、歴史、

文学、絵画、それぞれ家庭教師をつけて、毎日、勉強させて

た」

クララ「朝5時から、起こされてみたいね。さすがに厳しすぎ

たって、フェリックスもこぼしてたわ」

ロベルト「当時59歳だったツェルターは、最初にフェリックスの

才能を見抜いた」

クララ「そして、彼が12歳になった時、親しかったゲーテに紹介したのよね」

タイトル ゲーテハウス ワイマール 1821年11月 フェリックス12歳

演奏 ベートーベンのピアノ曲を弾いているフェリックス

ゲーテ「72にもなつて、こんな演奏を楽しめる、長生きはするものだ」

フェリックス「お気に召していただけましたか？」

ゲーテ「フェリックス、聡明なお前のことだ。今、世の中がどうなっているかは知っておるだろう」

フェリックス「ナポレオンが遠い島に流されて、平和になったんじゃないありませんか？」

ゲーテ「これは一種の揺り戻しだ」

フェリックス「揺り戻し？」

ゲーテ「物事は全て、一直線に進むわけじゃない」

フェリックス「曲がったりするんですか？」

ゲーテ「曲がりもするだろうが、揺り戻すという意味は、一気に進み過ぎると少し戻ることだ」

フェリックス「ナポレオンが進め過ぎたんですか？」

ゲーテ「そうだな。そして、少し道を間違えた」

フェリックス「でも、もう戦争はないんでしょ」

ゲーテ「暫くは大丈夫だろう。しかし、一度進み始めたものは、決して元へは戻らん」

フェリックス「また人が死ぬんですか？」

ゲーテ「フェリックス。人は誰でも死んでしまう」

フェリックス「僕も？」

ゲーテ「そうだ。誰にも死を逃れることはできない」

フェリックス「怖いな……」

ゲーテ「怖がることはない。死を恐れるより、生きることを考えるんだ」

フェリックス「生きること？」

ゲーテ「メッテルニツヒは、ナポレオンを悪魔と罵ってるが、ベートーベンは同じ男を英雄だと思ったこともある」

フェリックス「でも……」

ゲーテ「皇帝を名乗った時、怒ったのは確かだ」

フェリックス「道を間違えたんですね」

ゲーテ「賢い子だ。わしは、ナポレオンが見直される時が来ると思う」

フェリックス「また戻って、皇帝に？」

ゲーテ「いや、多分、評価されるのは、死んだ後だ」

フェリックス「死んでから褒められても……」

ゲーテ「わしが死んでも、ファウストやウエルテルは生き続ける」

フェリックス「でもナポレオンには作品が……」

ゲーテ「奴が残したのは、新しい秩序だ。それに比べれば、わしの小説などちっぽけなもの」

フェリックス「僕にも何か残せるかな」

ゲーテ「人は好きな時代に生まれることはできない。このつかの間

の平和を無駄にははいかんぞ」

暗転

クララ「小さい頃から魅力的だったのね」

ロベルト「フェリックスの魅力の一つはユダヤの偉大な哲学者だった爺さんの血だ」

クララ「モーゼスね」

ロベルト「好奇心が旺盛で、探究心の塊だった。あのキラキラした瞳が魅力のすべてだったのさ」

クララ「確か新聞も作ってたのよね」

ロベルト「資産家で名士だったメンデルスゾーン家を訪れたヘーゲルやハイネが原稿を書かされてた」

クララ「夏は『庭園新聞』、冬は『お茶と雪新聞』」

ロベルト「ゲーテが言った通り、フェリックスはヨーロッパに訪れた東の間の平和を満喫した。16歳の時、ライプツィヒの屋敷に移ってから、その広大な庭で、シェイクスピア劇を上演し、11歳の頃から、ノートに書き続けた楽譜は44冊にもなってる」

クララ「モーツアルト並みね」

ロベルト「スイスへ行けば、山々の音を聞き、ヨードルを分析してツェルターを喜ばせてる」

クララ「演奏家としても優秀だったんでしょ」

ロベルト「9歳でデビューしてる。君と一緒にだ」

クララ「私はフェリックスでもモーツアルトでもないわ」

ロベルト「君たち3人に共通しているのは、父親が教育熱心だったってことだ。でも違いはある。君とモーツアルトの先生は父親そのもの」

クララ「フェリックスのお父様は、教師を雇ってた」

ロベルト「それも超一流をね。それに彼は、演奏しても一切謝礼を

受け取らなかった」

クララ「その必要のない家庭に育ったから…」

ロベルト「フェリックスはロベスピエールからナポレオンに引き継がれたブルジョア革命の申し子だ。血筋ではなく財力が教養を育んだ。文化のパトロンが変わりつつあった」

クララ「ベルリンはナポレオンの支配下で自治権を確立していて、フェリックスが3歳の時にユダヤ人にも居住権が認められたのよね」

ロベルト「メンデルスゾーン家は、モーゼスの時代から、ベルリンに住んできた。普通のユダヤ人とは、違う扱いを受けてたんだが、それでもモーツアルトの時代には考えられないことだ」

クララ「おじい様の教養を引き継いで、お父様の経済力に守られてた上に歴史もフェリックスに味方してたってわけね」

ロベルト「あからさまな差別を受けた事はほとんどなかった。でもフェリックスは自分がユダヤ人であることを決して忘れなかった」

クララ「お父様は名前を変えられたのよね」

ロベルト「フェリックスもキリスト教に改宗してるんだが、名前だけは変えなかった」

暗転

タイトル 1825年 春 パリ音楽院 ルイジ・ケルビーニ学長

執務室 フェリックス16歳

ピアノ四重奏曲短調を引いているフェリックス
耳を傾けているケルビーニと父アブラハム。

ケルビーニ「演奏に拍手を送り」アブラハム、君がここへ来たのは、単なる息子自慢ではあるまい」

アブラハム「勿論です。先生にフェリックスの将来を見定めて戴こうとはるばる伺いました」

ケルビーニ「65にもなった痲癩持ちの老いばれに期待されてもな」

アブラハム「私は子供たちが望むなら、どのような仕事についても構わないと思っております。ただ……」

ケルビーニ「ただ……？」

アブラハム「音楽でも、美術でも、実業家でも構わないのです。ただ、どのような職業でも、一流と呼ばれる人間になって欲しいと教育してきました」

ケルビーニ「フェリックス君、おとうさんは厳しかったか？」

フェリックス「はい。小さい頃は、逃げ出したいと思ったこともありません」

ケルビーニ「だが、逃げ出さなかったか？」

フェリックス「……はい」

ケルビーニ「フェリックス、君は父上に感謝するんだな」

フェリックス「……！」

ケルビーニ「アブラハム、この子は豊かな才能を持っている。音楽家として、これから立派にやっっていくだろう」

アブラハム「ケルビーニ先生……」

ケルビーニ「いや、もう十分立派にやっっておるではないか」

アブラハム「ありがとうございます」

暗転

タイトル 親子は、喜びと共にパリを後にした

馬車に乗っているフェリックスとアブラハム。

アブラハム「名前のことは考えなおしてもらえないのか」

フェリックス「おじい様の名前です」

アブラハム「そのおじい様だってメンデルをメンデルゾーンに変えたんだぞ」

フェリックス「でもユダヤの血筋を隠そうとはしませんでした」

アブラハム「改宗もしなかった。お前は違う。キリスト教徒のマホメットがいないように、キリスト教徒のメンデルゾーンもあり得ない」

フェリックス「おじい様は、お父様が前におっしゃっていたように、

新しい社会に溶け込むために名前を変えられたんですよ」

アブラハム「そうだ。同じ理由で私もバルトルディを名乗った」

フェリックス「僕は、メンデルズゾーンがキリスト教徒になれる世界に生きたいんです」

アブラハム「……！」

暗転 弦楽八重奏曲変ホ長調 OP20

クララ「珍しく怒ったのね」

ロベルト「アブラハムが息子の名前を変えようとしたのは、親心だろう。ユダヤ人であることによって起こる理不尽な差別から守ろうとしてたんだ」

クララ「フェリックスは、戦うつもりだったの？」

ロベルト「そうかもしれない。でも生きている間、直接的な被害は

なかった」

クララ「それも時代が味方したんじゃない？」

ロベルト「僕たちはベルリンの発展とともにあった。この四十年で

ベルリンはヨーロッパ第四の大都市になった」

クララ「皆で走り続けているんだから、差別してる暇なんかなかったのよ」

ロベルト「そんなベルリンに帰ったフェリックスは。二週に一回、自宅の庭で開かれるコンサートの主役を務めながら、シエイクスピアにも挑んだ」

クララ「兄弟で役を分け合って、本格的に演じてたのよね」

暗転

タイトル 1826年 夏 メンデルスゾーン家庭園 ライプツッ

ヒ通り3番地 ベルリン フェリックス 17歳

シーシアス(パウエル)「さて、お美しいヒポリタ、我ら結婚も間近に迫った。待つ身の楽しさも あと4日、月も生まれ変わる。ああ、なんともどかしいことか。この古い月の欠けて行くのが」

ヒポリタ(レベッカ)「その四度の昼はたちまち夜の闇に溶け、四度の夜もたちまち夢と消え去ります。そして、新たな月が、天高く引き絞られた銀の弓のように現れ、私たちの結婚の夜を見守ってくれるのです」

パウエル「フアニー姉さん、ダメだよ。やっぱり僕はパックの方がいい！」

レベッカ「そうよ。シーシアスはお兄様じゃなくっちゃ、台詞に気持ちが入らない」

フアニー「二人とも我がままね。これはお芝居なんだから、お客様を夢の世界に誘うのが目的でしょ」

レベッカ「でもパウエルは、とても思慮深いアテネの王様には見えな

い」
パウエル「僕もそう思う。この前はパックで、ハイネさんにも褒めてもらえたし」

フアニー「もう一度見たい、と思ったお客様を、あなたは最初の時

と同じように喜ばせることができるかしら？」

パウエル「同じようにやればいいんですよ」

フアニー「それじゃ足りないの。私たちのお芝居のお客様は、同じ方が大勢いらっしゃるでしょ」

パウエル「お父様のお友達だから……」

フアニー「あなたにはまだわからないかもしれないけれど、皆さん、とても才能がおありになって、それぞれの分野で一流と言われている方々なの」

レベッカ「ごきげんよう 永遠の海よ いくどでも ごきげんようと 沸き立つ心からあいさつしよう

そのむかし 幾千のギリシアの人々が 不幸に打ち勝ち 故郷をあこがれた

世にも名高い ギリシアの人々が 心からお前にあいさつしたように」

フアニー「海へのあいさつね」

レベッカ「ハイネさんの詩はとっても好き」

パウエル「ヘーゲルさんは、ハイネさんの先生なんだよ」

フアニー「そう、おじい様と同じ哲学者、フンボルトさんは？」

パウエル「探検家だ！南アメリカにも行ったことがあるんだぞ！」

フアニー「ほらね。そんな皆さんに同じものを二度お見せすることはできないの」

パウエル「じゃあ、違うお話にすればいいじゃない」

フアニー「『真夏の夜の夢』は、今の季節にピッタリでしょ」

パウエル「僕は『十二夜』がいいな。決闘もあるし」

フアニー「最初の嵐のシーンが難しいでしょ」

レベッカ「私はヒポリタでいいの。でもシーシアスは……」

フアニー「レベッカ、フェリックスは今、このお芝居の序曲を書いているの」

パウル「音楽がつくんだ！」

レベッカ「序曲だから、お芝居が始まる前に流れるの！」

フアニー「そうね。でもいつかは、全部の場面の曲を作ると思うわ」

パウル「その時はパックをやるんだ！」

フアニー「そうね。だから今回はギリシアの大公をお願いね」

パウル「わかったよ！」

暗転

♪ 真夏の夜の夢序曲

クララ「楽しそうね」

ロベルト「序曲は完成して、日曜コンサートでセンセーションを巻き起こし、翌年、1827年、2月20日ボンメルンのシユ

テッティンでフェリックスの指揮で公開演奏も行われた」

クララ「大作作曲家、フェリックス・メンデルスゾーンの華々しいデビューね」

ロベルト「でもそのすぐ後に手痛い失敗もしてる」

クララ『「カマーチョの結婚」』

ロベルト「フェリックスは自分が仕上げたオペラはベルリンの王立

歌劇場で上演されるもんだ、と思ってた」

クララ「若かったのね」

ロベルト「セルバンテスのドン・キホーテの中にある地主が貧しい

若者と結婚しようとする美しいキテリアに。横恋慕するという

話だ」

クララ「なんだか『フィガロの結婚』みたい」

ロベルト「見てないのかい？」

クララ「私、まだ7歳よ！あなたは見たの？」

ロベルト「まだ大学にも入ってない。17歳のフェリックスは、

52歳の劇場音楽監督、ガスパーロ・スポンティーニとやり

あって、1827年4月29日、ベルリン歌劇場の小劇場での

上演を実現させた」

クララ「お父様の援助もあつたんでしょ」

ロベルト「勿論後押しはあつた。でも、結果的には大失敗だった。

フェリックスは最後の幕が下りる前に劇場から姿を消した」

クララ「公演は一回だけじゃないでしょ」

ロベルト「幸運なことにドン・キホーテ役の歌手が病気になって、

二回目以降はキャンセルされた」

クララ「落ち込んだでしょうね」

ロベルト「二度と上演されなかったところをみると、上出来とはい

えなかつたんだろうな。フェリックスにもそれはわかつてたはずだ」

クララ「分からないこともあつたんじゃない？」

ロベルト「日曜コンサートにしても、常に評判がよかったわけじゃない。新聞に酷評が出たこともある。ツェルターがゲーテに宛

てた手紙があるんだ」

暗転

ツェルター「彼らは音楽専門誌でフェリックスの弦楽四重奏や交響

曲を冷たく扱っています。この自称紳士の方々は、自分たちの

頭上遥かにあるものを、冷酷に切り捨てるのです。たった一つの

レンガを観て、家全体を判断しようとする。呆れたもので

す」

暗転

クララ「フェリックスは黙ってたの」

ロベルト「身内以外にはね。例の庭園新聞に詩を書いた」

暗転

フェリックス、スポーツに浮かび上がり以下を朗読。

「もしも芸術家が厳肅に書いたなら それはひと眠りさせるため

もしも芸術家が楽しんで書いたなら それは悪趣味なものなのさ

もしも芸術家が短く書いたなら 長々聞くとはお気の毒！

もしも芸術家が短く書いたなら 誰も少しも気に留めぬ

もしも芸術家が単純に書いたなら あいつは阿呆といわれるさ

もしも芸術家が複雑に書いたなら 奴は気狂い、見りゃわかる

どうせどんなに書こうとも 誰も喜ばせるなんて出来はしない

そんなら芸術家は書けばいい お気に召すまま やれるまま」

暗転

♪ 歌の翼に

歌の翼に愛しき君を乗せて ガンジスの野辺へと君を運ぼう

そこは白く輝く美しい場所

そこは赤い花が咲き誇る庭 静寂の中 月は輝き スイレンの花

愛する乙女を待つ

スマイルは微笑み 星空を見上げ バラが耳元でささやく

芳しきおとぎ話

賢くおとなしい小鹿 走り寄り 耳をそばだてる

遠くに聞こえる 聖なる川の流れ

僕等は椰子の木の元に降り立ち 愛と平穏を満喫し

幸福に満ちた夢を見よう

暗転

クララ「落ち込んでばかりいたわけじゃないでしょ」

ロベルト「探究心の方が勝ってた。それまで1世紀近くも演奏され

た事のなかったバッハの「マタイ受難曲」を復活させたんだ」

クララ「ツェルター先生のジングアカデミーに頼んだのよね。弟子の願

いを先生は喜んで受け入れたんでしょ」

ロベルト「そうでもないんだ」

クララ「どうして？」

ロベルト「アカデミーは恐れていたのさ」

クララ「何を？」

ロベルト「演奏報酬に無頓着なアマチュアで、オーケストラですら

雇うことができるユダヤ人銀行家の息子にアカデミーが乗っ取

られることを……」

暗転

タイトル 1829年1月某日 ジングアカデミー ライプツヒ

フェリックス19歳

ツェルターを前にフェリックスとエドアルト・デヴリエント

(28)

ツェルター「エドアルト・デヴリエント君！君が我がジングアカデ

ミーの優秀なメンパーであることは私も十分承知しておる。そ

の君とフェリックスの頼みでも、そう簡単にはいかんだ」

エドアルト「ツェルター先生！バッハが偉大な作曲家であることは、

先生も含め多くの方が認めていらつしやいます。にも拘わらず、

彼の作品は、いくつかのピアノ練習曲以外、滅多に演奏される

ことはありません」

ツェルター「百年前に書かれたこの壮大な音楽が、至高の作品であ

ることは総譜を読むだけで十分伝わってくる」

エドアルト「確かに僕たち音楽家には理解できます。でも、普通の人は、それを私たちが音にして、演奏しなければその素晴らしさを味わえない！」

ツェルター「そのためには、完璧な演奏が求められる。残念ながら、我がジングアカデミーだけでは……」

エドアルト「先生の日ごろの親身なご指導で、アカデミーの聖歌隊は、十分な実力を持っています。それにバッハの偉大さを知らしめるために協力したいという外部の音楽家を僕らはもう何人も抑えているんです」

ツェルター「しかし、楽器はどうするんだ？オーボエ・ダ・カッチャなど、誰も持っていないぞ！」

フェリックス「バスクラリネットで同じ音は出ます」

エドアルト「フェリックスは、先生から、お借りした総譜をもう演奏用書きかえてるんです」

ツェルター「いいか、今までにも、多くの先人が、この「受胎曲」に取り組んで、公演を実現しようとした。しかし、君らより遥かに経験を積んだ彼らでも実現は不可能だったんだ」

エドアルト「確かに僕らはまだ若い。でも未熟ではありません。そして若さの特権として、勇気と冒険心があります！」

ツェルター「そんな無謀な冒険心で、観客に4時間もの大作を理解させようというのか！」

フェリックス「ソロのアリアや二重唱をいくつかカットして、レシタティーボの「見よ、神殿の墓は二つに裂け」は、オーケストラに変えました」

ツェルター「それでは復活にならんだろう！」

フェリックス「僕たちの目的は、アカデミックな楽譜再生ではあり

ません！」

エドアルト「先生！こうして愛弟子二人が重要なことを手掛けようとしているんです！決して後悔はさせません！どうか喜んで応援して下さい！」

フェリックス「お願いします！」

ツェルター「わかった。とにかく理事会にはかけよう」

暗転。

クララ「エドアルトって確か、オペラ歌手だったわよね」

ロベルト「そうだ。彼の協力がなかったら、ツェルターも決断できなかったらう」

クララ「鼻根の引き倒しを恐れてたのね」

ロベルト「それもあつたらう。とにかく、アカデミーは、裕福なメンデルズゾーンから、すっかりホール使用料の前払いを受け取り、1829年3月11日、『マタイ受難曲』はフェリックス

の指揮で復活したんだ。その時の様子を合唱団の一人だったファニーが手紙に書いてる」

スポーツに浮かび上がるファニー。
ファニー「ドアが開いた途端、ずっと外で待っていた人たちがホールに殺到しました。15分もしないうちに満席。我が愛すべき弟、フェリックスは、演奏家と聴衆の視線を一身に受け、その

全員を虜にしたのです」

暗転

スポーツに浮かび上がる燕尾服のフェリックス

♪マタイ受難曲 歌詞対訳 国井健宏

来たれ娘たちよ とともに嘆け 見よ 誰を？ 花婿を 彼を見よ
どのような？ 子羊のような！

見よ 何を？ 彼の忍耐を 見よ どこを？ 我らの罪を

愛と慈しみゆえ 自ら 木の十字架を背負われる

あのお姿を見よ

おお 罪なき神の子羊よ 犠牲として

十字架に架けられた御方よ

たとえ侮辱されようとも 何時でも耐え忍ばれた

すべての罪をあなたは背負われた

さもなければ私たちの望みは絶えていただろう

我らを憐れみ下さい おお イエスよ！

フアニー「ホール内は協会のような雰囲気を満たされていました。

深い静けさと荘厳な婦依の心が全ての人々に拡がり、時折、無

意識に漏れる深い感動の声が聞こえるのでした。この感動を生

み出したのは、まぎれもなく式台に立つフェリックスだったの

です」

暗転。

クララ「フェリックスは指揮者としての評価も高かったわね」

ロベルト「音楽をまとめ上げ、楽譜を作曲者の意図をくみ上げて再

現する。そういう指揮者の先駆者だった」

クララ「指揮ってそもそも作曲家が、自分の曲を正確に演奏しても

らうためのものだったんでしょ」

ロベルト「フェリックスが始めるまで、自分以外の曲の指揮をする

人は殆どいなかった。コンサートマスターや協奏曲のソリスト

がその役割を担ってたんだ」

クララ「バッハの魅力を読譜から読みとって、そのエッセンスを伝

えようとしたら、演奏者全員を率いることになったわけね」

ロベルト「それまで、日曜コンサートのプログラム作りで培ってき

た経験が花開いたんだ。それぞれの楽器が、正確に楽譜を音に

する以上の演奏を作り上げた」

クララ「バッハの公演は、一部の評論家から批判を受けたものの、

聴衆からの支持は圧倒的で、10日後の3月21日に再演され

たのよね」

ロベルト「バッハの誕生日だ。その後もいくつかの都市で再演され、

そのいずれでもフェリックスは指揮台に立ったんだ」

クララ「でも王室オーケストラは認めなかったのよね」

ロベルト「父親の財力とフェリックスの才能に嫉妬してたんだろう。

ベルリンは、彼の真価を評価するところまで、都市としてまだ

成長してなかったんだ」

クララ「『フェリックス・メンデルスゾーン？子供にしては才能が

あるね』

ロベルト「当時のベルリンの権威ある音楽界重鎮の方々の態度だね」

クララ「ナポレオンの残した自由主義はまだ浸透してなかったのね」

ロベルト「でも、皮肉なことにナポレオンがいなかったから、フェ

リックスは自分を素直に受け入れてくれる場所に行けたんだ」

クララ「平和だったから、どこへでも行けたのね」

ロベルト「フェリックスと父親は、保守的なベルリンを離れる最初

の目的地として、ナポレオンの宿敵でありながら、その理想を

産業革命という武器で実現したイギリスを選んだ」

クララ「豊かになった民衆が芸術を素直に評価していた場所」

暗転

♪ 交響曲第一番

タイトル ロンドン 1829年4月 フェリックス 20歳
スポットに浮かび上がるフェリックス

フェリックス「姉さん！ロンドンでは地球上で最大の、そして複雑極まりない怪物です。ベルリンで過ごす6か月よりも、この三日間の方が遥かに多くの違いと変化を目にすることが出来ます。ここには乞食もいれば黒人もいます。太ったイギリス紳士がほっそりとした美しいお嬢さんと腕を組んで歩いている！そして西インドドックでは、船のマストが家々の屋根の上に突き出ています。船が何列にも浮かんで、ここに比べれば、ハンブルグの港は水門のある池にしか見えません。僕はここで、世界の偉大さに触れています」

交響曲終わり、絶賛の拍手を浴びるフェリックス
暗転。

クララ「フェリックスは18世紀のヘンデル、ハイドンに次ぐ三番目のドイツ人ヒーローになったのね」

ロベルト「かつて私は父の息子として知られ、今は息子の父として知られている」

クララ「お父様、アブラハムの言葉ね」

ロベルト「アブラハムはもっと評価されている人物だ」

クララ「父親として？」

ロベルト「教育者としてだ。レオポルド・モーツアルトとは大違いだ」

クララ「満遍なく基礎の教養を身につけさせて、才能が芽を出したら、しっかり守って、自由に羽ばたかせる」

ロベルト「操られてる、という見方もできるかもしれないが、決して強制はしてない」

クララ「当然、ヘンデルやハイドンのことも知ってたのよね」

ロベルト「息子の才能を率直に受け入れてくれる場所を選んで、名

声を獲得させてる」

クララ「イギリスにはライバルもいなかったわ」

ロベルト「でも演奏家は優秀だった」

暗転

♪ベートーベン 交響曲第八番 変ロ長調アレグレット
指揮台にいるフェリックスとコンマス。

フェリックス「美しい。素敵です。皆さん、僕は皆さんが十分な演奏力を御持ちで、僕のスケルツォを完璧に表現して下さることも知っております。でも、今はベートーヴェンの音楽が聴きたいのです。これは魅力的な作品だと思います。でも、まだ二三か所、大きく鳴りすぎるところがあります。もう一度真ん中辺りからやってみましょう」

コンマス「いや、いや、もう一度最初からやり直しましょう。その方が私たちも満足できます」

フェリックス「ありがとうございます。一緒にベートーヴェンを満足させましょう」

ロベルト「オーケストラでは、指揮者だけが演奏家だという人もいる」

クララ「演奏家は単なる楽器？」

ロベルト「そういう風にひねられる演奏家はロンドンにはいなかった。フェリックスはイギリスで指揮棒を使った最初の指揮者の一人だ」

クララ「それまでは、紙を丸めたり、ヴァイオリンの弓を使っていたのよね」

ロベルト「短い指揮棒で、彼は、個々の演奏をまとめ、最初の観客

として、音楽を聴き、奏でたんだ」

クララ「そして最高の気分で、スコットランドへ向かったのね」

暗転

タイトル 1829年 秋 メンデルスゾーン家 ベルリン フェ

リックス20歳

フアニー、レベッカ、パウルの三人がフェリックスからの手紙を
読んでいる。

パウル「兄さんは今、どこにいるの？」

フアニー「エディンバラ」

パウル「血塗られた女王のところ！」

レベッカ「クインメアリはとくに亡くなっています！」

パウル「知ってるよ。そんなこと。血塗られた女王が住んでたこ

ろだってことだよ」

フアニー「そうね。フェリックスはその女王様が、祈りを捧げた教

会を観てきたらしいわ」

レベッカ「お兄様は御姉さまの結婚式までに帰ってこれるのかし
ら」

パウル「無理だよ！スコットランドはロンドンより遠いんだぞ！」

楽譜の走り書きが落ちる。

パウル「なんだこれ、楽譜みたいだけど！」

レベッカ「私にもみせなさい！」

パウル「僕が拾ったんだ」

フアニー「乱暴にしちゃダメ。フェリックスの新作なんだから」

レベッカ「でも、1、2、二十小節しかないわ」

フアニー「最初の部分だそうよ」

♪ 交響曲スコットランド

暗転

クララ「でもスコットランドが完成したのは、つい最近じゃない？」

ロベルト「この頃からフェリックスは、作品の完成に時間をかける
ようになった」

クララ「旅行が影響してるのね」

ロベルト「見たままを反射的に音楽にするのではなく、熟成させる
方法を身に付けたんだ。そこで、偉大なる教育者、アブラハム

は、フェリックスを3年にもなる壮大な旅へと導いた」

クララ「確か最初にお爺さんの故郷に行ったのよね」

ロベルト「そうだ」

暗転

タイトル デッサウ 1830年3月 フェリックス21歳

フェリックス「百年前、おじいさまはここで生まれたんですね」

アブラハム「この小さなユダヤ教会が、学びの原点だった」

フェリックス「お父様が、ロンドンの次にここへ連れてきてくだ

さった理由がわかるような気がします」

アブラハム「ロンドンが未来なら、ここは、原点だ。私もお前も始

まりはここだ」

フェリックス「イタリアへ行く前にワイマールに寄ろうと思いま
す」

アブラハム「知の巨人ゲーテをお訪ねするんだな」

フェリックス「はい。随分御無沙汰しますから」

アブラハム「ヴィルヘルムをどう思った？」

フェリックス「姉さんが、画家を伴侶に選んだのは、とても素晴ら

しいことだったと思います」

アブラハム「音楽的才能は皆無だからか？」

フェリックス「どんな楽器で、教えても音程がとれなかった」

二人、顔を見合わせて笑う。

フェリックス「それに、姉さんの音楽のパートナーは僕で十分ですから」

アブラハム「他人が入る余地はないわけだ」

フェリックス「はい！」

暗転

クララ「ゲートルには、ファウストの草稿と、「第一のヴァルブルグ

スの夜」に曲をつける許可をもらったのよね」

ロベルト「ゲートルとはこの時が最後だった。その後、ミュンヘン、

ザルツブルグ、ウィーンにも寄ってる」

クララ「不真面目なゴミ捨て場だ！」

ロベルト「あの頃のウィーンは、ハイドンやモーツアルト、ペー

トーヴェンを軽く見てたからな」

クララ「そして、10月にイタリアに着く」

ロベルト「フィレンツェ、ヴェネチア、ローマで美術館を巡り、ナ

ポリやポンペイにも出かけて、スポンジのように先人の遺産を

吸収していったんだ」

クララ「ペートル・ベンの恋人やモーツアルトの息子にも会ってた」

ロベルト「フェリックスの活躍はイタリアでもよく知られてたんだ。

だから、誰とも会うことができた。その中に、パリから来て

いたベルリオーズもいた」

暗転

タイトル 1831年 5月 ローマ フェリックス22歳

ピアノ演奏

フェリックスの演奏に拍手を送るエクトール・ベルリオーズ

(26)

フェリックス「『サルダナパルス』でローマ大賞を受賞したエク

トール・ベルリオーズさんに拍手を戴けるとは光栄の至りで

す」

エクトール「よしてくれ、あんな曲、出だしのアレグロはできそ

ないだ」

フェリックス「それはよかった！」

エクトール「モーツアルト以来の神童もお気に召さなかったかな？」

フェリックス「はい。僕はあなたがあのアレグロを気にいつている

のかと思ってたんです」

エクトール「育ちがいいとは聞いてたけど、君は本物だな」

フェリックス「嘘はつけなくて……」

エクトール「普通ならぶん殴られるようなことを、そう素直に言わ

れると」

フェリックス「憎めませんか？」

エクトール「憎いね。婚約者にいきなりふられて、逆上してる俺に

は、君が悪魔に見える」

フェリックス「でも殴れない」

エクトール「君が俺を怒らせたわけじゃないことが分かるんだ」

フェリックス「僕は、あなたを一方で軽蔑し、もう片方で羨んでる

んです」

エクトール「出来れば、羨ましい方から聞かせてもらえるかな？」

フェリックス「あなたの音楽は、自由です。何事にも囚われていな

い」

エクトール「裏を返せば、滅茶苦茶だってわけだ」

フェリックス「そうなります」

エクトール「そう素直に認められると殴る気も失せるが、一言言い返したくはなる」

フェリックス「どうぞ、ご遠慮なさらずに」

エクトール「お前さんは、ちよいと堅苦しすぎる。杓子定規だ」

フェリックス「窮屈な気はしないんです」

エクトール「そこが問題なんだ。せいぜい俺様を見習うんだな」

フェリックス「じっくり勉強させていただきます」

エクトール「それがいけないんだ。もつと大雑把になれよ」

フェリックス「頑張ります」

エクトール「だから頑張っちゃいけないんだ！」

二人楽しそうに笑う。

暗転。

クララ「気があつたみたいね」

ロベルト「二人の音楽が違いすぎたから、親しくなれたんだ。フェリックスは、7月にイタリアを発ち、ミュンヘンに向かう」

クララ「運命の出会いがあつたのよね」

ロベルト「そんな大層なものじゃない。フェリックスは音楽に関しては早熟の天才だが」

クララ「恋の方は、奥手もいいところ。お相手は17歳のピアニスト、

デルフィーネ」

デルフィーネ

タイトル 1831年9月 ミュンヘン フェリックス22歳

ワルツを踊るフェリックスとデルフィーネ

デルフィーネ「フェリックス、御願ひがあるの。聞いて下さる？」

フェリックス「僕で出来ることなら」

デルフィーネ「連弾の時、私の小さな手では届かないキイがある

の」

フェリックス「僕が弾いてあげるよ！」

踊り続ける二人

暗転

クララ「このかわいらしい恋は、結局実らなかった」

ロベルト「でも、曲は生みだしてる」

♪ピアノ協奏曲第一番ト短調

クララ「ミュンヘンにいる間に作つたのよね。フェリックスは初恋

も音楽にかえてしまった」

ロベルト「12月にパリに着いた」

クララ「同じユダヤ人で銀行家の息子だったジャコモ・マイヤベー

アが活躍してた」

ロベルト「フェリックスはベルリオーズと逆の意味で、マイヤベー

アを嫌ってた」

クララ「近親憎悪ってこと？相手は40の親父でしょ？」

ロベルト「自分が書けないオペラで注目を浴びてたことに嫉妬も

あつたんだろう。珍しく感情的な感想を書いている」

クララ「でも慕ってくる人もいたでしょ」

ロベルト「同じユダヤ人のフェルディナント・ヒラーがいたし、

シヨパンやリストと四人がよくカフェに集まってた」

暗転

タイトル カフェ・ドゥマゴ パリ 1832年2月 フェリックス

ス23歳

ヒラー(20)シヨパン(21)リスト(21)とコーヒーを飲んで

いるフェリックス

カルクブレンナー(47)が通りかかる。

ヒラー「先生！カルクブレンナー先生！」

カルクブレンナー「君は確か…」

ヒラー「私など、先生ほどの高名なピアノリストにして、自らハイドンの後継者と名乗っていらつしやるような方が知るはずもないでしょうが、丁度若い音楽家が集まっております」

リスト「そうです。どうかほら、こちらにお座りになって、未熟者に聖なる御言葉を戴ければ、光栄の至り」

と言いながら、二人でカルクブレンナーを真ん中に座らせる。

カルクブレンナー「フランツ・リスト君だったなピアノリストの」

リスト「私など先生に比べれば単なるピアノ弾きです」

ヒラー「申し遅れました。フェルディナンド・ヒラーでございます。

そしてこつちが、フレデリック・シヨパン」

シヨパン「いつぞやは失礼しました」

カルクブレンナー「ああ、フレデリック、ポーランドの…」

リスト「そしてこちらが、フェリックス・メンデルスゾーン」

カルクブレンナー「名前は聞いてる」

フェリックス「お恥ずかしい。ろくな噂ではないでしょう」

ヒラー「僕らのことなどどうでもいいのです。先生、先生はどこで

あのハンドガイドなんてしろものをでつち上げたんです」

リスト「ヒラー君、『でつち上げた』なんて、言葉に気をつけなさい。大ヒット商品だぞ！疲れた腕を休ませる」

シヨパン「腕じゃない。筋肉を休ませるんだ」

リスト「誰もが正しい手の位置を身につけられる」

ヒラー「先生、シヨパンはいまだに後悔しててんです。先生のもと

で三年修行するチャンス逃したって」

リスト「そうです。そうすれば先生の代役が勤められたのに！って

ね」

ヒラー「リスト君、失礼なことを言っではいけない。先生は決して

弟子をご自分のコピーにしようとしたわけじゃない」

リスト「ヒラー、君こそ失礼だぞ。偉大なるカルクブレンナー先生の境地にたどり着けるものなどこの世にいるわけがない」

フェリックス「せいぜい代役が務まるだけですよね」

リスト「そして、観衆は口を揃えるんだ。やつぱり大先生とは違

うってね」

ヒラー「大違いだ。全然違う」

カルクブレンナー「確かに私の演奏は…」

リスト「ヒラー、大先生は僕らと違ってお忙しいんだ！」

ヒラー「そうだった！先生！今日は、貴重なお時間をわれら若輩の

ために割いて戴き、誠にありがとうございました」

リスト「さあ、お立ちになって、お弟子さんが列を成してお待ちで

すよ」

ヒラー「お若くて気品に満ちた奥様もです。さあ、どうぞお急ぎに

なつて」

カルクブレンナー、殆ど追いやられるように下手に去る。

リスト「あまり胸をそらせると後ろに倒れますよ」

ヒラー「折角のお顔が見えません！」

リスト「落ちてるコインも見つけられない」

四人、大いに笑う。

フェリックス「いつもながら君たちは人が悪いな」

シヨパン「やりすぎですよ」

リスト「フレデリック、本当は、フェリックス先輩の助言に従って

よかったと思ってるんだろ？」

シヨパン「それはそうだけど…」

ヒラー「カルクブレンナーの時代はもう終わりさ。音楽は人を楽し

ませるものだ、威圧するようなものじゃない」

フェリックス「その通りだね。フレデリックもフランツもとつくに

彼を凌いでる」

ヒラー「フランツは、別の意味でご婦人方を熱狂させてるがな」

リスト「勝手に失神するんだ。別に頼んでるわけじゃない」

フェリックス「観客が変わってきてるのも確かだ。作品を素直に受

け取って、反応するようになった」

ヒラー「お貴族様は、確かに失神などなさらない」

フェリックス「でもパリはまだまだだな」

フレデリック「僕は好きですよ。どこか退廃的で」

フェリックス「僕はもう少しし、前向きなほうがいい」

ヒラー「ロンドンですか」

フェリックス「そうロンドンだ」

暗転

クララ「そして、またロンドンに戻ったのね」

ロベルト「4月だ。フェリックスはまた熱狂と共に迎えられる。コ

ンサートでは喝采を博し、ノヴェロ社が出版したピアノ小品集

「無言歌」はベストセラーになった」

ピアノ演奏 無言歌

クララ「多くの女性たちが客間で無言歌を弾いていた」

ロベルト「フェリックスにとってイギリスの居心地の良さは格別

だったろう。もしかしたら、ヘンデルのようにそのまま住みつ

いてしまったかもしれない」

クララ「ツェルターが亡くなったのね」

ロベルト「5月15日だ。すぐに、ベルリンで家族会議が開かれて、

ジングアカデミーの監督として、フェリックスをツェルターの

後継者に推すことになったんだ」

クララ「本音のところでは彼をベルリンに連れ戻したかったってと

ころでしょ」

ロベルト「本人は最後まで乗り気じゃなかった」

クララ「でもメンデルスゾーン家の鉄の絆がそれを許さなかった」

ロベルト「優れた教育者だったアブラハムも息子を手元におきた

かったんだろう」

クララ「お姉さまもね」

ロベルト「しかし、この計画は、保守的な理事たちの反対にあつて、

挫折してしまう」

クララ「『この声楽アカデミーは、キリスト教の団体であり、その

点からしても、指揮者にユダヤ人を据えるなどとは前代未聞

だ』なんていった人もいた」

ロベルト「1833年1月、理事会は、フェリックスの不採用を決

定する」

クララ「可もなく不可もないルンゲンハーゲンが、144対

88、56票差だったのね。その結果、アカデミーは最大の

後援者だったメンデルスゾーン家を失い、すっかり元気を失っ

てしまったんだわ」

ロベルト「予測通りだったとはいえ、フェリックスの受けたシヨッ

クも大きかった」

クララ「でも救世主が現れたじゃない」

ロベルト「ロンドンとデュッセルドルフだ」

タイトル 1833年4月 ロンドン フェリックス24歳

♪交響曲イタリア

ロベルト「またしてもロンドンでの公演は大成功だった。イタリアを指揮し、モーツアルトのピアノ協奏曲を弾いたフェリックスの聴衆の中には、ニコロ・パガニーニもいたんだ」

パガニーニ(51)「君の演奏を聞いたのは、ベルリンでの日曜コンサート以来だが、今夜も実に見事だった」

フェリックス「パガニーニさんに聞いていただけるなんて、実は、このイタリアには少々自信があったんです」

パガニーニ「イタリアの明るさが音になって押し寄せたよ。どうかね、今度君のピアノと私のバイオリンでベートーヴェンに挑戦してみるというのには？」

フェリックス「夢のようですよ！是非お願いします！」

パガニーニ「君と組めば平均年齢37のコンビだ。私も若返られる」

暗転

ロベルト「残念ながらこの夢の競演は実現しなかった」

クララ「5月にはデュッセルドルフで開かれたライン音楽祭監督の仕事があったのね」

ロベルト「アブラハムもやってきていた。ここで父親は自分の教育の成果を目の当たりにする」

暗転

タイトル 1833年 下ライン音楽祭 会場 デュッセルドルフ

フェリックス24歳

タイトル ここで観客の皆さんにお願いです。今劇場に入ってきた

ようにざわついて戴きたいのです。そして、登場するフェリックスの指示に従って、皆さんでアブラハムを驚かしてください

ざわついている客席。舞台中央にフェリックス登場。下手でそれ

を見つめるアブラハム。

フェリックス「皆さん、少しお静かに！ちよつとからだをほぐしましょう！さあ立ち上がってください。いいですか、右手を前に出して、伸ばしたまま、胸の前に持つてきます。いいですか。

その右腕を左腕で胸の方に押ししてください。ゆっくりとね。左手の掌がご自分の方を向いていれば、肩関節の後ろ側、もし反対なら同じ関節の前側を直していることとなります。後で反対

の腕も試してみてください。

今度は、両手を前に出して、真つすぐ伸ばした後、肘を曲げて祈りのポーズを取りましょう。いいですか？その手を左右に

拡げて、私がハイと言ったら、すばやく閉じます。いいですか。では、ハイ！」

手を叩く音が響く。

フェリックス「ちよつと遅れた人がいますね。次は頑張りましょう。手を開いて。今度は一度だけじゃありませんよ。段々速くなりますからね。いいですか、ハイ、ハイ、ハイ、ハイハイハイハイハイ」

会場が拍手に包まれる。

フェリックス「ありがとうございます！私も随分コンサートを開かせて戴きましたが、始まる前にスタンディングオベーションを受けたのは今日が初めてです。では、音楽をお楽しみください

受けました。では、音楽をお楽しみください

いい」
フェリックスがタクトを振り下ろすと、『トランペット序曲ハ長調OP101』が流れ始める。

タクトを振り続けるフェリックス。

アブラハム「青の会場にいる皆が、フェリックスの言うがままになっ
た」
なっていた。肩書きも威厳もない若造に、嬉々として従ってい

た」

暗転
ロベルト「人間万事塞翁が馬」

クララ「中国の格言ね」

ロベルト「いいと思ったことが悪い結果を呼び、そのまた逆もある
ってことだ」

クララ「ベルリンに帰りたくなかったフェリックスはお父様をロン

ドンにお連れしたのよね」

ロベルト「ロンドンの素晴らしさを訴えたかったんだらう」

クララ「でも57歳になっていたお父様はそうは思わなかった」

ロベルト「夏だと言うのに霧が漂っている陰気な街だった」

クララ「確か、足を怪我されて、一か月も帰国が遅れたのよね」

ロベルト「フェリックスは、この時もまたヘンデルになれなかった
んだ」

クララ「家族の絆……」

ロベルト「結局、10月にデュッセルドルフに戻り、音楽監督にな

る」

暗転

タイトル 1834年 11月 デュッセルドルフ フェリックス

25歳

フェリックス「違う違う違う！いいか、君たちが演奏しようとして
いるのは、あのゲーテの物語にベートーヴェンが書いたエグモ
ント序曲だぞ！お互いのミスのカバーし合うような演奏で二人
の天才を汚すなんて、二人の眼の前でこうするのも同然だ！」
目の前のスコアを真二つに破る。

暗転

タイトル 12月 メンデルスゾーン邸 ベルリン

レベッカ(23)がファニー(29)とコーヒーを飲みながら話
している。

レベッカ「お兄様がベートーヴェンのスコアを破るなんて……」

ファニー「どうせベルリンに戻ってこないのなら、ロンドンに行か
せてあげればよかった」

レベッカ「ロンドンには毎年たっぶり三か月も行ってるじゃない」

ファニー「デュッセルドルフは、フェリックスには小さすぎるんだ
わ」

レベッカ「のんびり作曲してたらいいのに」

ファニー「創作には刺激が必要なのよ。それに、フェリックスには
お父様やパウロのような調整力がないの」

レベッカ「今まで運が良かったのよ。いつも一流の演奏家に囲まれ
て、シヨパンやリストにまで尊敬されて」

ファニー「そういうえば、シヨパンとヒラーをデュッセルドルフまで
連れてきたって」

レベッカ「さびしかったんでしょ。お兄様が前に書いてきた教会音

楽監督のこと覚えてる？」

ファニー「『擦り切れたコートを着た気難しくて年老いた音楽家。
自分はもうこれ以上よい音楽はできないし、やるつもりもな

「い」そう言つてやめさせられた人ね」

レベッカ「あの時お兄様は、自分が同じ目に会うことを恐れていたのよね」

フアニー「あれは、とても消極的なフェリックスの決意の表れだったんだわ」

レベッカ「どういう意味？」

フアニー「自分は決してあんなふうにみじめにはならない……」

レベッカ「それって……」

フアニー「デュッセルドルフの演奏家を観ていると、自分の中に潜んでいる特権意識を感じるんじゃないかしら」

レベッカ「……辛い……でしようね」

フアニー「フェリックスはデュッセルドルフを出るべきだわ」

暗転

クララ「あなたも同じことを感じてるのね」

ロベルト「ありがたいことに僕はもう40を過ぎてる。それに君や子供たちもいる。少なくとも二年以上はもつはずだ」

クララ「ライプツィヒがもう少し早く復興していればもっと早くデュッセルドルフを出られたのに……」

ロベルト「ライプツィヒは文化の街だ。150件の本屋、50件の印刷屋、それに30の定期出版物があり、織物会館を意味するゲヴァントハウスでオーケストラが演奏する街なんだ」

クララ「そして、あなたと私が出逢った街」

暗転

♪ 静かな海と楽しい航海序曲
タイトル 1835年10月4日 ゲヴァントハウス ライプツィヒ フェリックス26歳

フェリックス「伝統あるこのゲヴァントハウス管弦楽団に監督としてお招きいただき、私は、今、本当に幸せです。ここには素晴らしい演奏家の方々と音楽を愛する心豊かな聴衆の皆さんがいます。でも、残念なことにまだ完成されてはいません。私は、この街を音楽の都に仕立てるお手伝いをしたいと思います」

拍手と歓声に包まれるフェリックス。

暗転

クララ「『フェリックス・メンデルスゾーンは、一歩踏み出した。最初の瞬間、100もの眼が彼に注がれた。やり方が変わったのだ。皆作品の選択でそれを知ることが出来た』」

ロベルト「自分の書いた記事を読まれるのは照れ臭いな。でもフェリックスは喜びと同時に一月後、後ろ盾をなくしてしまう」

クララ「お父様が……」

ロベルト「フェリックスはアブラハムの静かな最期に立ち会うことはできなかった」

クララ「でもこの曲を完成させた」

♪ 聖パウロ

ロベルト「1836年5月、デュッセルドルフでフェリックスはこの曲を自ら指揮して、父親と同時にパッハへもオマーヂュをさげてる」

クララ「弟のパウルが立派に銀行業を引き継いでたし、娘二人も理想的な伴侶を見つけ、フェリックスは、最高の作品に仕上がってた」

ロベルト「フェリックスは正しく父の死を受け取って、歩みを止めることはなかった」

クララ「ゲヴァントハウス演奏家の報酬を上げるために奔走し、自

分の曲を差し置いて、バッハは勿論、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェンを再認識させて、あなたもデビューさせた」

ロベルト「実際の貴族にろくな奴はいないが、フェリックスはノブレス・オブリージユ、貴族の負うべき義務を真つ当に果たしていたんだ」

クララ「そして、それを楽しんでた」

ロベルト「そして、ようやく兄弟の中で自分だけが、独身だと気づく」

クララ「育ちのいいフェリックスは、叔母さまの紹介で知り合ったセシル・ジャンルノーと高校生のようなデートを重ねて、お母様の許可をもらった上で…」

♪ 結婚行進曲

タイトル 1837年3月28日 ワロン・フランス教会 フラン

クフルト フェリックス28歳

管楽器の演奏の中、タキシードのフェリックスとウエディングド

レスのセシル(18)

満面の笑みをたたえる二人

暗転

クララ「この結婚行進曲はまだできてなかったんじゃない？」

ロベルト「実際に演奏されたのは女声合唱用のものだけど、ここで使わないと、真夏の夜の夢を再現しなくちゃいけないだろ」

クララ「二人は幸せな結婚生活を送り、翌年にはカールが生まれてる」

ロベルト「家庭生活と音楽家としての活動を両立させたのは僕と

フェリックスくらいだ」

クララ「私たちはまだわからないけど、フェリックスは家族を増や

すことと、ライプツィヒを音楽の都にする仕事を両立させ、演奏家としても作曲家としても八面六臂の大活躍してる」

ロベルト「しかも全ての仕事をこなすのはゆつくり家族と過ごすためだったんだ」

クララ「シヨパンもリストもベルリオーズもライプツィヒを訪れ、フェリックスは彼らの為に最大のもてなしをしてたけど、一番重要なのは子供たちと過ごすことだったのよね」

ロベルト「そんな中、1839年、僕が見つけたシューベルトの交響曲をフェリックスは見事によみがえらせてくれた」

♪ シューベルト 交響曲第九番ハ長調

クララ「シューベルトも復活させて、マリーも生まれた」

ロベルト「でも未来に向かっていたフェリックスを過去が呼び戻す」

暗転

クララ「王位についたフリードリッヒ・ヴィルヘルム4世ね」

暗転

タイトル 1841年 11月 メンデルスゾーン家 ベルリン

フェリックス 32歳

フアンニと対しているフェリックス

フェリックス「僕は王様の飾りじゃない」

フアンニ「私たちはあなたにベルリンに戻って欲しかったのよ」

フェリックス「姉さんや母さんと過ごせるのは最高だよ。でも実力はないくせにプライドだけは超一流のオーケストラや官僚を相手に、計画だけが壮大な王様の要求を満たすことなんかできないんだ」

フアンニ「デュッセルドルフ程ではないと思ってたの」

フェリックス「少なくともあそこには僕を歓迎してくれる人がいた」

フアニー「きっとこれは、あなたにとっての試練なのよ。ペートー
ヴェンが耳を失ったのと同じ」

フェリックス「姉さんはこの苦しみが何かを生み出すって言うのか
い」

フアニー「そうよ。あなたは決して負けない」

暗転

♪交響曲 スコットランド

タイトル 1842年 5月 バッキンガム宮殿 フェリックス
33歳

玉座に座ったヴィクトリア女王(23)とアルバート公(23)
に拝謁するフェリックス。

フェリックス「女王陛下に置かれましては、このような機会を設け
て戴き、私…」

ヴィクトリア女王「フェリックス」

フェリックス「！」

ヴィクトリア「フェリックスありがたいことにこのヴィクトリアと
アルバートに拝謁したいと申し出る者が数多くいるということ
は聞いております」

フェリックス「勿論私も…」

ヴィクトリア「いいえ、違うのです。あなたは違うの」

アルバート「そうなんだ。私たちはあなたのファンでね。是非会い
たかったんだ」

ヴィクトリア「だから堅苦しいあいさつは抜きにして、アルバート
自慢のオルガンを弾いて下さらないかしら？」

フェリックス「それは勿論、喜んで！」

二人「やったー！」

♪麗しきかな よき訪れを告げる者は！

暗転

クララ「イギリスはフェリックスの揺りかごね」

ロベルト「素晴らしい事が起れば、悲しみもまた訪れる。同じ年
の12月12日、フェリックスは最愛の母を失う」

クララ「今度はまにあつたの？」

ロベルト「駄目だった。ライブツィヒにいたんだ」

クララ「あれだけ家族思いのフェリックスが両親の最期を看取れな
かったのね」

ロベルト「その代わり、ライブツィヒに音楽院を設立し、『真夏の
夜の夢』の付帯音楽を全て完成させた」

暗転

タイトル 1843年4月3日 ライブツィヒ音楽院 フェリックス
34歳

スポットに浮かび上がるフェリックス

フェリックス「この音楽院は、4年前に亡くなった法律家ハインリ
ヒ・ブリュムナー氏の寄付を元に、ザクセン王の協力を得て、
本日でたく開校することとなりました。教授陣には、我が盟
友ロベルト・シューマンをはじめ、フェルディナント・ダー

ヴィト、更に私自身も作曲を担当させていただきます。今日、
ライブツィヒは新たな音楽の都として輝かしい未来を切り開く
のです」

タイトル 1843年10月14日 ポツダム新宮殿 フェリックス
34歳

♪ 真夏の夜の夢

ス 34歳

♪ 真夏の夜の夢

スポットに浮かび上がるフアニー

フアニー「私たちは、真夏の夜の夢に育てられたのです。そして、フェリックスは、シェイクスピアの尽きることのない才能から湧き出た登場人物を再び創り上げて、彼自身のものになりました。フェリックスは今、シェイクスピアに並び立ったのです」

タイトル 1844年 秋 王室謁見の間 ベルリン フェリックス

ス36歳

ヴァイルヘルム4世「本格的にベルリンを去るというのだな」

フェリックス「寛大なる陛下の御采配のおかげをもちまして、後進の指導と作曲に精進させていただきます」

ヴァイルヘルム4世「そちがまだ、我が王国の音楽総監督であることに変わりはない」

フェリックス「仰せのままに」

ヴァイルヘルム4世「そちに作曲を命じる権利を余がもっていること

だけは肝に命ぜよ」

フェリックス「ハッ！」

♪ヴァイオリン協奏曲ホ短調

クララ「解放感に溢れてるわね」

ロベルト「私が教授に向いていないこともはつきりさせてくれた」クララ「でも、あの仕事のおかげで私たちが救われたのも事実よ」

ロベルト「そしてフェリックスは、あんなに嫌っていたベルリンで、恋をする」

暗転

タイトル 1844年10月 ベルリン歌劇場 フェリックス

35歳

♪ ジェニー・リンド(22) アリア

拍手とともに現れるフェリックス。

ジェニー「聞いていてくださったんですか？」

フェリックス「勿論だよ。ジェニー、僕は今すぐスエーデンのあなたの両親のところへ飛んで行って、お礼を言いたいぐらいだ」

ジェニー「お礼？」

フェリックス「僕に素晴らしく高く響くFシャープを届けて戴いた

ことへの感謝さ」

ジェニー「この上もないお言葉ですわ、プロフェッサー」

フェリックス「ライプツィヒへ来て戴けますかな、お嬢さん」

ジェニー「喜んで、但し条件がありますわ」

フェリックス「ディーヴァの願いであれば、なんなりと」

ジェニー「あなたご自身がお連れ下さるのでなければ、どこへもいきません」

フェリックス「それでは老骨に鞭打って、ナイトを務めさせていた

だきます」

二人顔を寄せ合って笑う。

暗転

タイトル 1845年12月4日 ゲヴァントハウス フェリックス

ス36歳

♪ ジェニー・リンド(23) アリア

ジェニーを学生たちが囲む。フェリックスはさりげなくジェニーの横に立つ。

フェルディナンド「ライプツィヒ音楽院オーケストラを代表して、

天使のソプラノ、ジェニー・リンド嬢への感謝の気持ちを込め

て、このシルバートレイを進呈します」

学生①「代わりに口づけを所望します」

学生②「いえいえ、情熱の抱擁を」

学生③「熱烈な愛を！」

学生④「僕と結婚して下さい」

フェリックス「驚いているジェニーを庇って」諸君、諸君たちの大変積極的なアプローチに戸惑っておられるジェニーになり代わって、お礼を述べよう。私、ジェニー・リンドは、皆さんの素晴らしくも驚くべき称賛を心から感謝しております。でも、私が皆さんにお返しできることは限られています。神が与えてくださったこの声で歌うことだけです。お許しただけですか？」

フェルディナント「十分すぎます！」

学生①「スウェーデンのナイチンゲールに」

ジェニー「ちよつと待つて下さい」

学生②「天使のお言葉だ！」

ジェニー「皆さんへの感謝の気持ちは、フェリックスが、メンデルスゾーン先生がおっしゃって下さった通りなんです……」

学生③「反論だぞ！」

ジェニー「いいえ反論ではございません。付け加えさせていただきます

たいのです」

学生④「僕を気に行ってくれたんですよね」

ジェニー「残念ながら、そうではありません」

学生④「人生101回目の失恋だ」

ジェニー「ごめんなさい。私が付け加えたかったのは、もし、私の歌が皆さんのおっしゃる通りのものなら、それは、神が下さっ

たこの声と、メンデルスゾーン先生のご指導の賜物ってことなんです」

フェルディナント「ジェニーと我が誇るべき学長に！」

全員「祝福あれ！」

フェリックスに微笑みかけるジェニー。

暗転

クララ「私がジェニーに会ったのは、二度目のゲヴァントハウスでの公演だったけど、彼女は明らかにフェリックスを愛してた」
ロベルト「フェリックスも彼女に夢中だった事は確かだ。でも、あれは、普通の愛とは違うような気がするんだ」

クララ「確かに、本来なら顔も見たくないはずのセシルがとても

ジェニーに親切だったわ」

ロベルト「フェリックスは、彼がバツハやモーツァルトを愛してい

たように、ジェニーを愛しく思ってたんじゃないか？」

クララ「賢いクララは、きつと其の事がわかってたんだわ。フェ

リックスが女性として愛を捧げたのは自分だけだったことに」

ロベルト「二人の間には何もなかったと？」

クララ「さあ、それはどうかしら。世の中にははっきりさせない方

がいいこともあるのよ」

暗転

タイトル 1846年5月 ライン川 フェリックス(37)

船上に並ぶ二人

ジェニー「下ライン音楽祭に感謝ね」

フェリックス「そうだな。二人を一緒に招待してくれた」

ジェニー「ニューヨークからお誘いがあったんでしょ」

フェリックス「とてもありがたいお話だったんだが、丁寧にお断り

した。長い船旅は、もう無理なような気がしてね」

ジェニー「今も船の上だわ」

フェリックス「確かにそうだが、大きな違いが二つある」

ジェニー「一つは流れに沿って川を下ると、波が押し寄せる海の
違いね。もう一つは？」

フェリックス「君が一緒だったことだ」

ジェニー「じゃあ、もし私も一緒にニューヨークに行くって言った
ら？」

フェリックス「！」

ライン川流域の景観を残して暗転。

スポットに一人浮かび上がるフェリックス

フェリックス「ジェニー、僕は、ライン川で君が、ライブツイヒを
離れる気はないの？と聞かれたことをよく思い出します。君は、
僕にずっとライブツイヒに住んでいて欲しくない、とも言って
いました。今すぐは無理だとしても、二年か三年あれば、僕の
ここでの役目も終わるでしょう。そうなれば、ここに留まっ
ている理由はありません。ベルリンか、ラインか、僕はどこかき
れいで、好きなだけ作曲ができる場所がいいですね。でも、君
が僕のために、いつでも歌ってくれなくてはいけませんよ」

暗転

クララ「ジェニーとの甘い生活を夢見てるわね」

ロベルト「この手紙をジェニーに送ったのは、1848年の10月、

二度目の発作の後だ」

クララ「文字とおり夢だったのね」

ロベルト「ジェニーとの出会いも彼は音楽にした」

暗転

タイトル 1846年8月26日 バーミンガム 英国 フェリッ

クス 37歳

♪ エリア

聞け イスラエルよ 主の声を聞け！

主のおきてに心を留めよ！

しかし我等の説教を信じる者は誰か

主の力が示されるのは誰に向かつてか？

イスラエルの救い主 主は言われる

暴君のもとで苦しむしもべに

聖なる神は言われる 主はこう仰せになる

わたしがあなたがたの慰め主 恐れるな

わたしがあなたの神だ わたしがお前を強める

それなのに死すべき人間を 恐れるとは

お前はいったい何者か？

天を掲げ 大地を固めてくださった神 お前をお造りになった

神を忘れるとは

一体お前は何者のつもりか？

ロベルト「初演は大成功だった」

クララ「でも気に入らない箇所があって直したんじゃないなかった？」

ロベルト「そうだ、そして、八ヶ月後の1847年4月13日、

10回目のロンドンでアルバート公の前で披露されてる」

クララ「でも、ジェニーはどちらでも歌えなかったのよね。彼女の

為に書いたのに」

ロベルト「そうだ。でも、フィルハーモニックソサエティの音楽会

での彼のコンサートでは客席に座ってた」

暗転

タイトル 1847年5月8日 ボタニックガーデン ロンドン

フェリックス38歳

ジェニーとお茶を飲んでいるフェリックス

ジェニー「コンサートが二つに每晚レセプション。忙しすぎるん

じゃありません？」

フェリックス「いつもは、ロンドンに来ると元気になるんだが、今

度ばかりは…。まあ、明日の船旅さえ、我慢すれば、少しは休

めるだろう」

ジェニー「誰もあなたを追い掛けてはいないのよ」

フェリックス「そんなふうに見えるかい？」

ジェニー「あなたはいつも走り続けている」

フェリックス「止まるのが、怖いのもかもしれないな」

ジェニー「ゆっくりお休みになって」

暗転

クララ「休めなかったのよね。確か、ケルンの近くで警察に捕まっ

たつて」

ロベルト「同じ名字のテロリストに間違われたんだ。確かにひどい

話だけれど、その次に襲ったショック程じゃない」

暗転

タイトル 1847年5月14日 メンデルスゾーン家 ベルリン

フェリックス38歳

合唱隊を前に指揮をしているファニー

ファニー「このヴァルブルギスの夜は、皆さんよくご存知のように

ゲーテの物語にフェリックスが、曲をつけたものです。登場す

る魔女や魔物たちの個性を活かすように歌う…（倒れる）」

女性①「ファニー！」

女性②「誰か、お医者様を！」

暗転

スポットに浮き上がるフェリックス 手に持った手紙を落とす

フェリックス「姉さんが…姉さんが…アーツ！」

暗転

スクリーンにフェリックスの書いたスイスの風景画

クララ「フェリックスが描いた絵ね」

ロベルト「ファニーの突然の死は受け入れがたいものだったんだろ

う。フェリックスは最愛の姉の葬儀にもいけなかった。何も手

に着かず、家でスイスに行つて、絵を描いてんだ」

クララ「確か、イギリスの音楽評論家に会ってたんじゃない？」

ロベルト「ヘンリー・チョーリーだ。彼はフェリックスの最期のコ

ンサートのたった一人の聴衆だった」

暗転

♪バツハ G線上のアリア

古びた教会のオルガンをシルエットで弾くフェリックス

ロベルト「フェリックスはこの後、ファニーへの想いを断ち切ろう

とベルリンに戻つてる」

クララ「でも逆効果だった」

ロベルト「そこにはファニーと一緒に過ごした思い出がそのまま

残っていたんだ。いないのは…

クララ「ファニーだけだった…」

ロベルト「そして、11月、ライプツィヒに戻っていたフェリックス

スを三度目の発作が襲う」

暗転

タイトル 1847年11月4日 ライプツィヒ フェリックス

38歳

ベッドに横たわっているフェリックス。その横にセシル。

フェリックス「誰か…いるかい？」

セシル「いるわよ。痛みは無い？」

フェリックス「いや…」

セシル「お疲れなのね」

フェリックス「うん、疲れたよ。ひどく疲れた」

暗転

タイトル 午後9時24分 ヤーコブ・ルートヴィヒ・フェリックス

ス・メンデルスゾーン・バルトルディ

Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy 死す。享年38

♪ 夜の歌

まばゆい昼は去りゆき 遠く金の響きが訪れる

時が夜の闇を歩み始める あらゆるものを奪いながら

思いもつかぬほど多くのものを

色鮮やかな喜びは消え 友の慰めも 誠の心も

愛する人の甘い瞳の輝きまで

全てを私から奪い去る

でも 愛しのナイチンゲールよ お前が 轟く滝とともに

神を讃えさえすれば 我等は共に また朝を迎える

タイトル メンデルスゾーン作品一覧

参考文献

H・クッファアーバーク著 横溝亮一訳

メンデルスゾーン家の人々～三代のユダヤ人～

1985年 東京創元社

ハンス・クリストフ・ヴォルプス著 尾山真弓訳

大作曲家 メンデルスゾーン

1999年 音楽之友社

メンデルスゾーン 小柳玲子企画・編集

夢人館7 メンデルスゾーン

1992年 岩崎美術社

ロジェ・デュフレス著 安達正勝訳

ナポレオンの生涯 文庫クセジュ

2004年 白水社

2015年9月11日 初稿